

第一特別会計より(立替)	〇	三〇〇,〇〇〇	三〇〇,〇〇〇
小計	九六〇,〇〇〇	八七九,九三七	△八一,九三七
前年度繰越金	一六八,四一四	一六八,四一四	
合計	一,一二八,四一四	一,〇四八,三五一	△八一,九三七

△印 収入減

支出の部

費目	予算額	決算額	増減
講師謝礼	二二〇,〇〇〇	二二〇,〇〇〇	二〇,〇〇〇
印刷費(含教本)	二九〇,〇〇〇	六〇,〇〇〇	二三〇,〇〇〇
宣伝費	一八〇,〇〇〇	八六,〇〇〇	九四,〇〇〇
通信費	六五,〇〇〇	七五,八三二	一〇,八三二
打合せ会議費	一〇,〇〇〇	〇	一〇,〇〇〇
消耗品費	五〇,〇〇〇	七,九二〇	二,九二〇
雇入料	二五,〇〇〇	二〇,〇〇〇	五,〇〇〇
教本原稿料	五〇,〇〇〇	〇	五〇,〇〇〇
夕食会費	一〇五,〇〇〇	七八,〇八〇	二六,九二〇
会場費	〇	六四,七九一	六四,七九一
講習会運営費	〇	九〇,〇〇〇	九〇,〇〇〇
合計	九六〇,〇〇〇	六一一,六二三	三四八,三七七

△印 支出増

〔横組〕『同声会会報』第三三六号 平成元年二月 一八頁

第二回(昭和六十二年八月二十六日・二十七日開催)以降、毎年夏期二日間にわたって本学音楽学部の施設を借用して行われている。事業部関係者のきめ細かい企画と熱心な広報活動により、第五回(平成二年)からは朝日新聞社の後援、第九回(平成六年)からは上野学園日本音楽資料室の協賛を得る。第五回以降一般社会人の参加も受け入れるようになり受講者は年々増加、定員を上回る年もあった。

なお、音楽学部が数年に一度のローテーションで行っている邦楽講習

会との混同を避けるために、第六回(平成三年)からは名称を「邦楽教育研究会」とした。さらに第十四回(平成十二年)以降は「邦楽研修会」と改め、定員を五十名とした。

本事業は次掲資料の開催主旨にあるように、わが国における伝統音楽のいっそうの普及と発展のための一助となることを目指している。

事業名 第十三回邦楽講習会 第一回 仙台邦楽講習会

事業開催主旨 邦楽は我が国の大切な民族音楽、伝統芸術でありながら、その社会的土壌は必ずしも豊かであるとはいえない。例えば小・中・高校における音楽教育の現場では、教科書に邦楽のことが記載されていても、音楽教科の先生が邦楽に対して近寄り難い感覚であり、楽器に馴染む機会もない。又一般社会人にも邦楽を特殊な風習の世界とする先入観があり、これらが伝統音楽の社会的広がり妨げている。

同声会では教育現場の先生方に、日本の楽器を持ったときの感触、音を出したときの印象などを生徒指導のうえで生かしてもらうために、さらに一般社会人にも邦楽をより一層日常的なものとしてもらうためにこの講習会を開催している。

〔横組〕

(五) 伊澤修二先生顕彰碑建立

東京芸術大学創立百周年を記念して、東京音楽学校初代校長にして同好会初代会長でもあった伊澤修二の顕彰碑が同声会より寄贈された。

「東京芸大創立百周年記念伊澤修二先生顕彰碑建立」パンフレット(平成元年四月二日)および「同声会会報」第三三七号(平成二年二月)の記事を紹介する。

東京芸大創立百周年記念

伊澤修二先生顕彰碑建立

平成元年四月二日

伊澤修二先生は嘉永四年（一八五二年）六月、信州高遠藩（現長野県上伊那郡高遠町）の藩士の家に生まれ、幼名を八弥、長じて修二といい楽石と号した。明治二年十九歳のとき上京、学問を修め文部省出仕となり、同七年国立愛知師範学校長に就任した。翌八年師範学科取調べのためアメリカに留学、マサチューセッツ州ブリッツデウォートル師範学校に入学し開発主義教育を学んだ。傍らメーソンより西洋音楽、またグラハム・ベルより視話法の指導を受けた。明治十年同校を卒業、続いてハーヴァード大学に入学して理学を修め、翌十一年帰国した。明治十二年東京師範学校に就任、同年十月文部省内に音楽取調掛を設置し、十四年同掛長となり、続いて二十年東京音楽学校を創設し初代校長に就任した。この間、音楽取調事務大要、音楽取調成績申報要略を文部省に報告、また小学唱歌集、唱歌掛図などを刊行し、日本における音楽教育の基礎を築いた。明治二十四年同校長を辞し、かねてよりその任にあった国家教育社の代表として教育費国庫負担運動などを推進した。同二十八年台湾における教育活動のため進んで現地へ渡り、翌二十九年台湾総督府学務部長となった。明治三十年帰国後貴族院議員に勅選され、三十二年東京高等師範学校長に就任した。三十四年退官、その後吃音矯正事業、中国音韻学の研究、および日中文化交流のために力を尽し、大正六年（一九一七年）五月、六十六歳を一期としてその気骨の生涯をと

じた。

伊澤修二先生が明治時代の教育界に残した多くの功績を偲び、東京芸術大学創立百周年を記念してここに顕彰する。

昭和六十二年十月四日

東京芸術大学音楽学部同声会

音楽教育創始の原点 伊澤修二先生顕彰碑

同声会会長 酒 井 弘

伊澤修二先生によって創設された東京音楽学校も、昭和六十二年に百周年を迎え、多彩な記念行事が行われました。その行事の一環として、同声会で先生の顕彰碑を建立することになり、以来準備を重ね、此度ようやく碑の完成を見るに至りました。誠に記念すべきことであります。伊澤修二先生は非常に多才な方であり、音楽以外のことにも幅ひろく活躍されました。従って短い碑文の中に、先生のご生涯のすべてを言い表すことは極めて難しいことでしたが、多くの先生方のご指導により立派な碑文がまとまり、誠に同慶の至りに存じます。碑文はなるべく誇張や装飾語を避け、事実を有りのまま書くよう心掛けました。そして分りやすい表現で、誰れにでも先生の業績を理解できる文に致しました。この碑文を当の伊澤修二先生は何んとお感じになるか、誠に気になるところであります。

今回の顕彰碑は、昭和六十二年秋除幕式が行われた、長野県高遠町の先生のブロンズ像と共に、芸大美術学部教授 西 大由先生の絶大なるご協力によって完成されました。心から感謝致しております。

す。

伊澤修二先生顕彰碑の完成を祝つて

芸大音楽学部長 服部 幸三

一昨年東京芸術大学音楽学部は、同声会はじめ各界のご支援を得て、伊澤修二先生が東京音楽学校をお始めになってから百周年を祝う行事を致しました。

たまたま、先生のご郷里である長野県高遠町からのお誘いを受け、私をはじめ教職員学生五十五名が高遠まで伺い、記念の講演会、演奏会及び展示会を開くことができたのは、懐かしい思い出になりました。催しは、芸大音楽学部の庭に立つ伊澤修二先生胸像のレプリカの除幕式から始まりました。伊澤修二先生の胸像は、創立五十周年を記念して同声会の手で建てられたのです。

このたびの百周年に当たっては、募金によって母校の事業をご支援くださるだけでなく、同声会の皆様が雑司谷の霊園に立派な伊澤修二先生の顕彰碑を建立されると伺って、心から嬉しく思います。このたびの顕彰碑はこれから先、芸大音楽学部に学ぶ多くの人達にとって、心の支えになるに違いありません。

伊澤先生顕彰碑建立にあたって偲ぶ

芸大美術学部教授 西 大由

教育とは、古い世代の文化的財産を、新しい若い世代に伝達する働きをなすものであり、それによって新しい世代の文化的な創造や価値の能力を養い育てる使命を有するものである——と教わりまし

たが、この度伊澤先生の顕彰碑の建立をお手伝い致しまして今更のように教育ということについて考えさせられました。先生御自身の限りなき研究を基礎に、次々とそれを実行される行動力は、平凡な人間の成し得ることではありませんが、この遍歴の裏の御苦労は想像を絶するものがあつたらうかと考えます。それに比べて現在の私達は、と聞かれたら返答のしようありません。音楽学部も美術学部も創立百周年を迎えましたが、この度の顕彰碑の建立は「初心にかえって芸術教育を考えろ!!」という先生からの警鐘として受けとめねばならないと強く想って居る次第です。

〔東京芸大創立百周年記念 伊澤修二先生顕彰碑建立〕パンフレットより〕

伊澤修二先生顕彰碑除幕式を終つて

理事長 中山 富士雄

東京雑司ヶ谷の伊澤家の墓地に伊澤修二先生の顕彰碑が完成し、昨年（平成元年）四月二日除幕式が行われました。この顕彰碑は、東京芸大創立百周年を記念して作られたもので、同声会によって一年半の準備期間の後完成したものです。碑は黒の御影石、この石に文字の銅板がはめ込まれて、総重量二トン半だそうです。

碑文は理事の澤野君が調整役になり、まず原文を理事会に提出し、意見に従って修正しました。その後理事、代議員の先生方に三回に渡って郵送し意見を求める一方、服部幸三音楽学部長、奈良教育大学教授で伊澤修二研究では第一任者^{だいいち}の上沼八郎先生、やはり修二先生について非常に研究しておられる、先生の故郷長野県高遠町図書館長森下正夫先生それから伊澤家ご一統の皆さん、特に修二先生の

弟、伊澤多喜男先生の孫に当られ、やはり修二先生について非常に詳しい河井公二様など多勢の方々に読んでいただき、修正を重ねた末に決定いたしました。澤野君の話によりますと、九回修正して煮詰めたそうです。ある特定の方に依頼すれば、書かれたものについて意見を言うことは出来ませんが、時間が掛っても多勢の人の意見を聞いて煮詰める、と言うのが理事会の決定でしたので、この碑文はまさに同声会の総意によって書かれた、と言うことになりました。

碑の銅版は、美術学部教授 西 大由先生が作って下さる。ことになり、碑文の清書は西先生のご友人の小俣安正様をお願い致しました。文字を銅版に仕上げるまでの作業は本当に大変なもので、西先生のご協力のお蔭で立派な銅版が完成し、心から感謝している次第です。小俣様が清書し、碑文の原版となった墨字の文は、作業の課程で多少傷が付きましたが、銅版完成後、西先生が返してくれましたので、今度は澤野君の知人の内村新平様が裏打ちして、立派な掛軸にして下さいました。傷は全くわかりません。この掛軸を入れる桐の箱も作りましたので、未永く同声会室に保存しておきたいと思えます。

内村さんには今回の顕彰碑の話をしましたところ、拓本も作ってくれました。拓本は西先生、伊澤様ほか、高遠町図書館など関係の皆様にお贈り致しました。

顕彰碑完成に当り紹介の印刷物を作りましたが、その中で音楽学部長 服部幸三先生は

「芸大音楽学部に学ぶ多くの人達にとって、心の支えになるに違い

ありません」と述べられました。これから先、日本における音楽教育の始りを研究する学生は、一度はここへ来てこの碑文を読むことと思います。世代が移っても、この碑は読む人に何かを語りかけてくれるに違いありません。

（『同声会会報』第三三七号 平成二年二月 九頁）

伊沢修二先生顕彰碑建立経費

収入の部		支出の部										
普通預金 祝儀 雑収入	三、五九六、四〇五 一一〇、〇〇〇 一、六一二	顕彰碑製作費										
		記念品代	記念品	記録費	印刷費	消耗品費	会場費	交通費	通信費	打合せ費	手数料	雑入費
計	三、七〇八、〇一七	三、〇〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	一一三、九三〇	一七一、七五〇	二一、一五七	一〇、〇〇〇	三三、九二八	二四、〇八五	二六、五五〇	二〇、四一二	四〇、〇〇〇
												一三、五〇〇
												三、七三〇
計	三、七〇八、〇一七	三、五七九、〇四二										

三、七〇八、〇一七―三、五七九、〇四二＝二二八、九七五

（『同声会会報』第三三八号 平成三年二月 二二頁）